

# 柳宗悦の民藝思想における「健康の美」概念の形成と展開

水津智博

「キーワード」：①柳宗悦 ②民藝 ③健康 ④病い ⑤生活

※引用史料中の旧字体については、適宜新字体に改めてある。ただし、仮名遣いについては、原文のままとした。

※引用文中に補足や解説が必要と思われる場合は、筆者註（<sup>ハ</sup>）を補った。なお、引用文中の傍線部は、筆者が付したものである。

※『全集』は『柳宗悦全集』第一―三巻下（筑摩書房、一九八一―一九九二年）からの引用である。

はじめに

「民衆的工藝」から「民藝」という言葉を生み出し、自らその普及と発展を指導した美術思想家の柳宗悦

(一八八九〜一九六一)は、一般に「宗教哲学者」「美学者」「平和思想家」として知られている。柳がその一生において発揮した思想と実践は、「モノ」を「直観」し、その背後に潜む「自然」「人」「歴史」「生活文化」を「近代」のなかで複合的に捉え直す営みにほかならなかった。今日でもなお、その存在を東京駒場から語り続ける日本民藝館は、柳の思索がいかに深く、そして複雑であったかを鮮明に伝えている。

本稿では、そのような柳の民藝思想を「健康の美」という側面から検討してみたい。柳は自身の民藝論及び民藝運動のなかで「健康の美」を最も重要な概念として掲げた。しかしながら、「美の本道」と位置づけられたそのような「健康の美」の意味と実像は、従来の研究において十分に問われてこなかった。<sup>(1)</sup>柳が強調した「健康の美」は、単に「モノ」の美しさを言い当てた表現にとどまらず、同時代の社会的状況において、柳が「民藝」を通して実感した理想的な暮らしや労働、文化の在り方を提案する、極めて多義的・複層的な表現であったと考えられる。

民藝論における「健康性」や「健康の美」に関して提出された先行研究では、鶴見俊輔氏、阿満利麿氏、大沢啓徳氏の研究をそれぞれ確認しておきたい。<sup>(2)</sup>

まず鶴見氏の研究では、生死の問題と「健康」の問題が関連づけて考察されている。氏は、柳の処女作『科学と人生』(一九一一年)に着目し、同書の中で記述される「生」と「死」の問題を、メチニコフ論における「老衰」の問題へと展開させて論じる。そして、柳が一九一〇年代前半期に論じた「健康」と、後年の民藝運動及び仏教美学論において掲げた「健康」の連続的な関係性を問うた。<sup>(3)</sup>

阿満氏の研究では、先の鶴見氏の視角と同様に、初期思想形成期における『科学と人生』及び柳の「老衰」観の検討が行なわれている。阿満氏の議論の特徴としては、メチニコフだけでなくホイットマンに対する関心

からも、柳の「健康」概念に着目している点が挙げられる。<sup>(4)</sup>

大沢氏による考察では、次の二点を挙げなければならない。第一は、「健全な美」がどのような美であるのかを検討したものである。氏は、柳が「喜左衛門井戸」を見た時に「平凡」極まったところの「健全な美」を見出したと説明しつつ、貧乏人が使う典型的な安い下手物、「製作においては作為なきもの、実用においては長期の使用に耐え得るもの」に「健全な美」が宿ると考察する。さらに、この「健全な美」と真逆の「病的な美」の定義として、作為の面から「技巧の病」「意識の毒」「自我の罪」を、非実用面から「感傷の遊戯」「変態」「華美な世界」をそれぞれ挙げ、「妙好品」という表現を引きながら、「無心」に作られた「モノ」に「健全な美」が宿るのではないかとまとめる。<sup>(5)</sup>

第二は、柳の思索をその一生から捉えた際の「健康の美」への言及である。氏はまず、メチニコフに対する柳の関心に着目し、「順生涯」という言葉には言及しておく必要があるものの、「柳においてはさほど重要なものではないと思われる」とし、メチニコフ論における「順生涯」と後の「健康」概念とは「無関係であるように思われる」と把握する。氏は、柳の民藝理論における「健康」とは「身体的な障害や、一般的・社会的な意味における奇癖は問題ではな」く、「精神における本来的な正しさという意味での健康性」を指すと解釈し、初期に見られる「健康」と後年の民藝理論における「健康」を区別した。<sup>(6)</sup>そして、鶴見・阿満両氏の「健康」概念の解釈に指摘を加え、民藝理論において柳が指す「健康」とは、あくまでも「身体からは区別された」ものとして理解される必要があると述べる。<sup>(7)</sup>

これらの研究成果は、いずれも一九一〇年代における柳の初期思想と一九二〇年代半ば以降の思想展開を切り離している、ないし一貫していたと考察しながらも、具体的な思想展開の内実が描かれていないように思わ

れる。

以上の研究状況を踏まえ、本稿では以下、民藝運動の文脈を補助線として引きながら、初期思想形成期から晩年に至るまでの柳思想を丁寧に読み込み、民藝論における「健康の美」概念の形成・展開過程について検討していく。そのうえで、「健康の美」を「標準の美」と位置づけた民藝思想の特質について考えてみたい。

## 一 民藝運動以前の「健康」観

### (一) 一九一〇年代における「健康」

柳の論稿に具体的な「健康」概念が初めて確認されるのは、一九一一年八月九月に『白樺』に掲載され、同年一〇月に靑山書店から刊行された柳の処女作『科学と人生』収録の論文「メチニコフの科学的 인생観」においてである。本書は、どのように「死」を見るか、どのように「死」に縁取られた「生」を見るかという関心に沿ってまとめられた、柳の二〇歳から二二歳にかけての「科学学習ノート」とされる。<sup>(8)</sup> 柳も、明治末期には心霊現象に関心を示し、それが科学で説明されることに期待を寄せた「時代の子」の一人であったが、それは心霊現象研究を「第三の科学」「新しき科学」「最後の科学」と定義づけ、人生の神秘を解き明かそうとしていたことに表れている。<sup>(9)</sup> 『科学と人生』は第一部「新らしき科学」と第二部「メチニコフの科学的 人生観」の二つのパートから構成されており、前者は心霊現象の研究に当たり、後者はロシアの細菌学者イリヤ・メチニコフ（一八四五～一九一六）の二著『人間の性』（一九〇三年）と『生命の延長』（一九〇七年）の要約に当たる。メチニコフは当該二著のなかで、人間の器官―とくに消化器官―にある不調和について検討し、老衰を避け

る工夫と「自然死」の実現を説いた。<sup>(10)</sup> 柳も「人性に存する多くの不調和を除いてかく完全な天寿を完ふする時、そこには自己保存の本能に換ゆるに自然死の本能が現はれ吾々は安らかなる永眠に入るのである」と捉え、「自然の死」こそが「人生最後の帰趣」であると考える。<sup>(11)</sup>

そのうえで、柳は「人心」が年とともに「進化発展」していくことの重要性を説きながら、それが「社会」に与える力の大きさを強調し、「科学」によって「高齢の福音」に包まれた老年期を生きることが人生の最も輝かしい到達点であることを指摘し、そのような人生を「順生涯」と呼ぶ。ここで、柳は人が「順生涯」を実現し「自然死」に入るには「死に至る迄健全なる肉体と精神とを保持する」こと、すなわち「健康は吾等をして順生涯を送らしむ可き基礎である」という一つの結論を導くのである。そして、その「健康」を害するような行動や考えを断ち切ることが「順生涯」＝「個性の充実」＝「理想」の実現に繋がることを指摘する。<sup>(12)</sup>

当然ながら、柳が指摘する「順生涯」のための「健康」を、後の「健康の美」と単純に同一視することはできない。また、後に柳が「科学」を消極的に眺めたことも念頭に置かなければならない。しかし、後述するホイットマンや木喰上人、妙好人といった人物―「民藝」を生む人間―が「健康」な「肉体」と「精神」を有し、「高齢の福音」に抱擁されながら「く」なっていくこと、そしてそれらの人物の生き方と「身体的健康性」に柳が関心を持ち、民藝品にも「身体的な健康性」―「実用」に耐え得る「丈夫」な体―を見出していたことは、柳がメチニコフの老衰研究に見出し、「社会」における「順生涯」とその手段として希求した「健康」が後の民藝論と全くの無関係ではないことを示しているように思われる。

このような「順生涯」を実現した人物として、同時期に柳はアメリカの詩人・作家であるウォルト・ホイットマン（一八一九―一八九二）に傾倒する。「健全な肉体と精神」を備え、「並」「当たり前」に価値を求めた

ホイットマンの生涯と思想を検討するなかで、「健康」に対する柳の関心はさらに深化していった。

一九三〇年に寿岳文章と共同で刊行し始めた雑誌『ブレイクとホキットマン』の創刊号に寄せた一文のなかで、柳はホイットマンの思想と民藝思想の関係性について、「工藝の世界、特に民藝の世界から私が教はった最も大事な事の一つは、健康の美と云ふ事であつた。…美には色々の姿があらうが、詮ずるに平凡だと云ひ棄てられてゐた「健康さ」の美が最後のものと云ふ事を味ふに至つた」と始めつつ「健康にまさる常道はない」と強調し、そのような美を謳つた人としてホイットマンを挙げ、「彼程健康を謳つた人はなく、又彼程自身に健康な肉体と健康な思想と健康な言語とを有つてゐた人は近代には珍らしい」と綴る<sup>(13)</sup>。このように、民藝における「健康の美」は、ホイットマンの「健康」さと不可分の関係にあつた。

一九一四年五月の『白樺』に掲載された「肯定の二詩人」においては、柳はその「肉体」「精神」からホイットマンを「本能の人」と把握し、彼の「肉体」に「本能的能力」「絶大な真理」を読み取る。そして、ホイットマンの詩は「心の遊戯」ではなく、「知的作動」も働かない「至純な素朴な事実」を映すものだと説明する<sup>(14)</sup>。

こうした柳のホイットマン受容は、戦後の一九五四年一月七〜九日にNHKで放送されたと推定される放送原稿「ホキットマンに就いて」のなかでも色濃く描かれている。時期は前後するものの、簡単に見ておきたい。柳は、ホイットマンが「病ひ」に犯されておらず「変態」でもない「並のもの」に最も健康な姿を見た<sup>(15)</sup>ことを指摘しながら、「ホキットマンの詩は健康さがその性質であると申されませう。彼自身も六尺の丈と頑丈な軀軀と、すこやかな相貌とを持っておりました。健康とは少しも特別な状態ではなく、人間本来の姿と云へませう」と綴る。そのうえで、「近代芸術」が「異常」「変態」「奇異」等の「病的」な傾向にあるのに対して、

ホイットマンの思想や信仰にはそれらがなく「健康」であると評価する。柳によれば、ホイットマンは「ひとり坦々たる平な大通りを太陽の光をあびて闊歩した人」だったのである。<sup>(15)</sup>

以上見てきたように、柳は一九一〇年代にメチニコフ、ホイットマンという二人の人物を通して、「人生」ないし身体的・精神的な意味における「健康」の重要性を学び取った。それは、前者からは「自然死」「順生涯」のための、言わば手段としての「健康」であり、後者からはその思想・詩を生む肉体及び人間性そのものの、言わば根源的な「健康」であった。一九一〇年代半ば以降、柳の「モノ」的な関心は朝鮮芸術に傾斜していくこととなるが、「老衰」のための「健康」の把握、そして「健康的な肉体と精神」を有した人間から「当たり前」を強調する精神態度が生み出されているという論理の獲得は、朝鮮芸術論の盛り上がりと前後して一九二四年に傾倒した木喰仏の分析視角に展開していったと言える。

## (二) 木喰と「健康」

柳は、朝鮮民族美術館の設立と前後する形で「直観的邂逅」を果たした木喰仏の調査・研究を通して、身体的・精神的な「健康性」が民藝を生むというメカニズムを自覚した。木喰仏の実態に関しては、今日柳の認識に疑問が投げかけられているが、いずれにせよ、大正後期まで美術史の文脈で顧みられることなかった木喰仏を「工藝の本来の姿」の一つとして提示し、そこに後の民藝論を構成する美的要素を読み取ったことは看過できない。

木喰上人（一七一八〜一八一〇）とは、江戸時代後期に実在した遊行僧・造仏聖で、上人が日本全国を廻りながら製作・奉納した一〇〇〇体以上の仏像を、今日では木喰仏と呼んでいる。柳は、上人が「享保三年」に

生まれ「九十歳前後の高齢を保」ち、木喰上人と呼ばれる所以を「嘗に彼が菜食であつたのみならず、調理されたものをとらず、主として天然の植物をそのまゝに食べて生きてゐたから」と紹介している。<sup>(17)</sup>戒律のもとのような菜食生活を送っていた上人の生き方と仏像の特徴に、柳は「健康」を見出していったのである。

一九二四年九月から翌二五年三月にかけて計七回に分けて発表された「木喰五行上人の研究」の記述を見ると、まず二四年九月に発表された「木喰上人略伝」のなかで、柳は上人について「彼は九十余歳を保つたのであるから、木食する事実在五十年に及んでゐる。而も晩年の筆跡やその彫像を見れば、如何に彼が健康であり絶大な精力を持つてゐたかが分る」と評し、<sup>(18)</sup>同年一〇月に発表された「故郷丸畑に於ける上人の彫刻」では、晩年における上人について「彼は老いて益々健かであつた。老に沈むのではなく若さに帰るのであつた」と綴り、「木喰の戒行四十年が、彼にこの旺盛な身体と健全な精神とを与へたのであらうか」と検討を進めている。<sup>(19)</sup>そのうえで、柳は上人のその「旺盛な身体と健全な精神」が「驚くべき生氣」に溢れた作——「生命が躍」り「強さ」「深さ」が読み取れる作——を生むと捉えている。ここから分かるように、柳は上人が高齢になつてもなお「健全」な肉体で仏像製作を継続した点と、そこから現れる美的特徴とを関連づけて把握しているのである。同年一二月に発表された「上人の日本廻国」においても、全国を行脚する「旅僧の彼」の風貌について、「肉体は健全であり四肢は強壯である」と繰り返し強調される。<sup>(20)</sup>

このような木喰仏の製作を支えた「木食戒」については、一九二五年八月刊行の『木喰五行上人略伝』に詳しい。このなかで、柳は「無心」で「執着」のない行脚の日々を支えた「木食戒」について「半世紀に亘るその精進は、彼に完き清浄とよき健康とを与へた」と述べ、単なる菜食生活にとどまらず、火食そのものや塩を避け、蕎麦粉を好んで食べたという「粗衣粗食」の日常を特筆する。しかし、そのような質素な生活にも関わ



らず、上人の遍歴に「病氣」とは記されていない点に言及し、「彼は旺盛な精神と健全な肉体との持主であつた」とまとめる。<sup>(21)</sup>「木食戒」による「健康」は、言わば宗教性を帯びた特徴とも捉えられるが、そのような修行の過程で「微笑む」仏像を数多く製作した上人の人間像に、柳は惹きつけられたのである。

木喰上人の身体性については、上人が晩年に長期滞在した現在の新潟県下の事例が興味深い。柏崎の地方紙『越後タイムス』では、遊行僧としての上人の姿が「飄々として来り飄々として去るものは風である。木喰五行は実に風であつた。何處からともなく来ては、何處ともなく去つて仕舞ふのだ」と紹介されながら、「鼠色の衣たゞ一着、火食をさへ断つ彼は、実に一厘の金を必要としないと全時に、年は既に米寿を越え乍ら、健康の身は殆ど人手を煩はす事がない」と記される。<sup>(22)</sup>『新潟新聞』では、四五歳から九三歳までの修行人生において、昼は修行や地域の民衆との交流を大切にし、夜に「線香の光」の下で仏像を刻んでいたという上人の生活の様子、そして「頗る健康な肉体を持つて病氣になつたこともなく、長いアゴヒゲを持つて常にニコ／＼してゐられた」という人間像が描かれる。<sup>(23)</sup>

すなわち、柳が木喰仏との邂逅によって見出した「健康」とは、上人自身（作り手）の身体的・精神的「健康性」にほかならない。このような上人の生き方、それを支えた「健康の身」は、ホイットマンや後述する妙好人の生き方、そして民藝を生む工人（職人）に共通しているのではないだろうか。民藝運動が開始すると、そのような「健康」観は、実際の「モノ」の美しさの尺度として認識されていくこととなる。

## 二 民藝論における「健康の美」

### (一) 一九二〇年代後半における「健康の美」と生活観

一九二五年二月二八日、木喰仏調査のために紀州を旅していた柳・濱田庄司・河井寛次郎は、津への道中「民藝」という言葉を作り出した。そして翌二六年一月一〇日、再び木喰仏調査のため紀州を訪れた際、一行は高野山西禅院にて「民藝」について議論を交わし、柳は民藝品のための美術館を設立することを宣言する『日本民藝美術館設立趣意書』を著した。趣意書は同年四月一日付で頒布され、ここに「民藝運動」が始まった。<sup>24</sup> 趣意書のなかで、柳は先に獲得した「健康」概念を民藝の美しさの文脈に落とし込んで記述している。冒頭の「趣意」で、柳は「民藝 Folk Art の世界」に「自然から産みなされた健康な素朴な活々した美」<sup>25</sup> Ⅱ「美の本流」が通っていることを見出しつつ、それが「日常の生活」に交わっていたため、却って歴史的に顧みられなかったことを嘆く。

柳が民藝美の特徴を説明する際に「健康」の字を当てたのは、この趣意書における当該記述の表記が最も早い。ここでは「健康の美」「健康な美」とは記述されていないものの、「健康な素朴な活々した美」を「民藝の世界」に見出した点からも、その起点を同趣意書に求めて良いと考えられる。

続いて、柳はそのような意図のもと蒐集する作品が主として「工藝」の領域に属する「民衆に用ゐられた日常の雑具」であることを明らかにし、「美術」Ⅱ「上手」のもの」と「雑具」Ⅱ「下手」のものを対比させ、後者に「健康な素朴な活々した美」が多く流れていることを指摘する。すなわち、「上手」のものは

「繊弱に流れ、技巧に陥り、病疫に悩む」のに対して、「下手」のものは「作為の傷」がほとんどなく「自然であり無心であり、健康であり自由である」ということである。<sup>(26)</sup>ここから分かるように、後年に体系化される民藝論ないし民藝美の特徴が、すでに簡潔な構図で整理されている。

趣意書においてその大枠が披歴された「民藝」は、二六年九月一九日付『越後タイムス』掲載の「下手もの、美」において理論的な深化を果たす。同論稿は「序」「跋」を含め計一二のパートから構成されているが、とりわけ、「三」では「下手もの」の定義に触れ、その最も重要な要素である「用」について詳述しているため注目に値する。

柳は、「毎日触れる器具」は「実際に堪へねばならない」としたうえで、それが「弱きもの、華やかなもの、込み入りしたもの」ではなく「分厚なもの、頑丈なもの、健全なもの」である必要を強調する。この「日常の生活に即する器」Ⅱ「人々に奉仕しようとして作られた器」こそが「下手もの」であり、「工藝」が「下手もの」に於て凡ての仮面を脱ぐ、すなわちその本質を現す所以なのである。とはいえ、柳によれば、その「用」とは単に「物的」な性質だけでなく「心的」な性質も有するとされる。柳は、「物心」両面における「用」を「忍耐」「健全」「誠実」と言い換えながら説明する。<sup>(27)</sup>

では、柳の指す「用」「実際」とは、具体的な生活におけるどのような働きを意味するのか。それはすなわち、民藝が「勤め働く身」であり、「貧しく」「素朴に」「慎ましく暮してゐる」普段の暮らしに由来する性質であり、「強き打撃」に耐え、他方「繊細」でもあるような美しい姿である。柳は民藝を「日々の伴侶」「私達の生活を補佐する忠実な友達」と把握し、「凡てが病弱に流れがちな今日、彼等のうちに健康の美を見る事は、恵みであり悦びである」と述べる。<sup>(28)</sup>

このようにして、柳の「下手もの」をめぐる「健康」概念の座標は定まっていた。「下手もの」は「用」を最も重要な役割として担い、日常生活の中で「私達」とともに暮らし、そして働かなければならない。そのため、人間が労働するのと同じように、「モノ」も相応の「労働」に耐え得る「体」を有する必要がある、必然的に「健か」で「素朴」で「誠実」な性質を帯びることとなる。これが「健康の美」であり、「生活」において見出される美しさとなるのである。

一九二七年二月に私版本で出された『工藝の協団に関する一提案』では、先の論理が、二〇年代後半に柳が傾倒したギルド社会主義思想の影響を受け、さらに深化している。柳は「正しい工藝」を生む人と人との関係生活の在り方を有機的に把握するなかで、単に「モノ」の健康性を志向するだけでなく、また過去の古作品だけではなく、新作民藝をも含めた「モノ」を生活全体の中で相対化させながら「健康なる生活」を希求するようになった。柳は、中世期の「ギルド」を倣って京都市賀茂に設立された工藝協団の運営を監督し、「モノ」から現実の「社会」を見直そうと尽力した。「協団」を「奉仕の生活」「質素の生活」「正しさへの奉仕」「美への奉仕」「社会への奉仕」と繰り返し強調したところに、一九二〇年代後半における民藝論の進展、そして「健康の美」の射程の広がりを探ることができる。<sup>(29)</sup>

一九二八年二月に出された『工藝の道』では、「実用」、すなわち「奉仕」が「労働」を支え、「健康の美」を生む論理を讀者に訴える形で何度も論じる。それによれば、工藝は「働く身であるから、健康でなければならぬ」とされ、日々の用具である以上「暗き場所」や「荒き取り扱ひ」にも堪えることができなければならず、常に「正しき質」と「安定なる形」を備えなければならないと言われる。そして、柳は「工藝の美は健康の美である」と結論づける。<sup>(30)</sup>

以上のように、民藝運動の開始とともに、柳は「用」という性質に「健康」の本質を見出し、人が「労働」するように「モノ」を把握しながら、「近代」における「生活」の在り方を問おうとしたのである。柳が二〇年代半ばから後半にかけて著したテキストの中で規定した「用」と「健康」の関係性、すなわち工藝の本質を「用」と設定し、その上位に「健康」を位置づけ、「モノ」と「人」の関係性を「生活」の中で相対化させるという思考の枠組みは、後の民藝思想の展開においても一貫し続けた。

「モノ」に宿る「健康の美」を「生活」の中で捉えようとする実践では、一九二八年に上野公園で開催された大礼記念国産振興東京博覧会に出品したパビリオン「民藝館」が興味深い。この「民藝館」は、柳らが住宅と家具を全てデザインした総合展示物である。同博覧会の報告書の「私設陳列館」のうち、「民藝館」の欄には「建坪三十五坪の平家住宅に、日本領土内各地の民衆的工藝品中、用と美と廉価の三条件を具備せるものを集めて、各室に配置し、家屋と建具及道具等の総合と統一を実際に示した」と紹介され、「此の施設は従来多くその例を見ない所で、生活改善の上にも一つの指針となり、而かも国産を奨励振興すべき施設であつて、予想以上の効果を収めた」と評されている<sup>(31)</sup>。

「健康の美」が工藝品・民藝品論において提示された一九二〇年代半ばから後半にかけて、柳の民藝思想はすでに「モノ」を「生活」の中で俯瞰して捉える社会改良・生活改善の意味をも含む思想に発展していたと見ることができよう。

## (二) 一九三〇年代に見る「健康」の相対化と沖繩文化

一九三〇年代に入ると、民藝運動の進展に伴い、柳の思想も体系化されていった。それは、「健康の美」の

内実が個別の工藝品を通して明らかにされていくとともに、「不健康なもの」「病的なもの」の実例が「健康」の比較軸として置かれ、痛烈に批判されていったということにはかならない。

二〇年代後半に唱えられた、「健康の美」が「生活」の中で求められるべきであるという主張は、三〇年代に入り、具体的な生活空間を例に議論が展開していった。それは「台所」であった。一九三三年一月の『工藝』三五号の「挿絵小解」では、「台所の美」が「無類の美しさ」であることが指摘され、民家における台所の「健全さ」が強調される。同時代の台所の趣味は「調子がなく」「中途半ばな洋風(yōfū)に死んで」おり、「やくざなものが多い」という柳の分析は、「座敷」には「病ひ」が付きやすく、「台所」には「病ひ」が付きにくく「健全」であるという構図に展開していく。<sup>(32)</sup>

では、「座敷」と「台所」にはどのような違いがあるのだろうか。柳は、「座敷」を「凝る所」、「台所」を「物が活きたまゝで列ぶ」「陳列館」とそれぞれ捉え、「忙しく働く」場所としての「台所」の特徴を挙げる。それによれば、「台所」は生活空間の中で最も頑丈に作られており、各調理器具・食器類が常に使われるように配置され、空間全体が休まずに働くからであるという。必然的に「無駄な装飾」が省かれ「丈夫に仕込まれた構造」を有する「体」、そこに柳は「健康性」を見出すのである。<sup>(33)</sup>

このように、柳が「建物のうち一番下積みの台所」に、生活・労働という論理に基づいて「健康の美」を見抜いていた点は、「健康の美」が単なる「モノ」に現われ「モノ」の美的特徴として完結するだけでなく、日常生活の中で「モノ」を通して「モノ」を取り巻く有機的関係性の中で「解される」「美」であったことを明確に示していると言える。

他方、三〇年代以降、同時代に蔓延る「不健康なもの」「病的なもの」の実例が多数紹介され、工藝品の本

質は「用」、そして「健康」にあることが一層強調されていく。柳は三〇年代前半から戦後にかけて、スポーツ大会の際に贈られる優勝カップやトロフィー、外国語の流行、「破形」「自由美」を意図的に狙う芸術傾向、博物館の陳列方法、建築物、蒐集の実態に至るまで、幅広いジャンルにおいて「工藝に限らず」「不健康」「病」の要素を挙げ、鋭く批判を突きつけた。

そのなかでも、三〇年代前半に集中的に唱えられた主張が、帝展に出品された工藝作品への批評文である。柳は大阪毎日新聞社の委嘱により、三〇年から三二年までの三年にわたり、「帝展の工藝」と題する論評を書いた。明治以来、「美術」の範囲は常に明確に把握されてきた一方、「工藝」は「美術」と「産業」の間で不定な位置を余儀なくされてきた。大正期に「工藝」の地位を確立しようと運動が起こったのと同様に、昭和初期には帝展にも工藝家自らが「工藝」の定義と実体を模索しようとした作品が出品された。<sup>34</sup> そのような「美術工藝」（「工藝美術」）に対して、柳は不快感を露わにしたのである。柳は、出品された工藝作品に対して「工藝がない」と言い切る形で、「用」に即した真の意味での「工藝」がなく、「美術化された工藝」が溢れる実態に警鐘を鳴らすとともに、審査員を務める作家の「眼の力」の弱さや「下検査」の必要性に疑問を投げかけた。三一年度の出品作品について、柳は「感傷的なもの、神経的なもの、皆美の本道ではない。やはり作品は堅実な生活を標示するものでありたい。自然な健康な簡素な作品が結局最も正しく美しい作品である」と述べ、帝展の作品は、「技巧の工藝」としては優れているが「内容の工藝」としては「空虚」であると総評した。<sup>35</sup> 加えて、柳は出品作品を「正しい工藝」と呼ばず、「帝展向き」「帝展型」と皮肉を込めて揶揄するが、まさにそこに「モノ」の「健康」を第一に重要視する民藝論的特質が窺える。「作品は堅実な生活を標示するもの」、すなわち「不健康なもの」の実態を提示するなかで「工藝の健康化」を唱えたのである。

一九三〇年代末から四〇年代初頭にかけて、柳思想並びに民藝運動の文脈で想起されるのは沖縄方言論争である。三・一独立運動以来の、言わば「政治的事件」に対する二度目の発言ということから、柳と沖縄の関わりでは当該論争が頻繁に取り上げられる。しかし本稿では、柳が関心を持った琉球文化のうち、芭蕉布を取り上げたい。芭蕉布とは、現在の沖縄本島の北部に位置する国頭郡大宜味村の喜如嘉と呼ばれる地区で盛んに作られている伝統的な織物である。柳は芭蕉布を「どんな地方のものに比べても引け目はない。其の中から醜いものを選ぶうとしても無駄である。どれもとり／＼に美しい。こんなにも自然な健在な品が今も生れるのは奇蹟に近い」<sup>(36)</sup>「現存する日本の織物の中で、最も秀でゝあるものゝ一つが芭蕉布なのです。∴ 伝統の道を踏む芭蕉布は安全な健康な織物なのです」<sup>(37)</sup>と絶賛し、その「健康性」に着目している。筆者が特に注目したのは、芭蕉布に対する柳の見方が、先に述べた「生活」における「健康」の見方と同様のものであり、「モノ」を「生活」の中で俯瞰する思考方法の延長線上に位置づけられるからである。

では、柳は芭蕉布のどのような側面に「健康」を見出したのか。まず柳は、材料の糸から話を始め、芭蕉の茎の外皮を剥がして現れる中皮の内側に縦に走る「まるで銀の糸」のような繊維の美しさに着目し、「清浄で、純潔で、美麗で、さうして強靱な」性質に惹かれ、そこに「地理の恩沢」を読み取る。続く、収穫された繊維を束ねて干し、乾いた物を細く裂いて織糸へと績む「糸績」という工程では、作業の「単調性」や「協同性」が指摘され、家や村全体で取り組み、ある種の「楽しみ」となっている労働の実態が取り上げられる。緋を出すための糸括りの作業では、「計算」——「数の美しさ」を生む「数の約束のもとで繰り返さねばならない模様」という側面の面白さを指摘する。藍（山藍）と茶（てかち）の二種類を用いて染色を行なう「糸染」では、その地域で取れる「自然」の素材から生まれてくる「健全」さが特筆される。「糸染」の後に行なわれる「栴



「巻」と呼ばれる、紡いだ糸を巻き付ける作業においても、柳は先の「糸績」のような「単調」な「反復」——「無駄のない手早い要を得た仕種」に見出せる「法式性」——を見て取る。そして「機織」では、「手織」による恩恵が強調され、機械を使用すると糸が切れるという性質＝機械が通じないという性質が「強力な機械の圧迫」を寄せ付けなかった点を感謝する。

このような芭蕉布の製作工程からも窺えるように、柳は「自然」に委ねることで一見「不自然」「不規則」と思われるような性質こそを志向し、個人的な技量に因らない「協同性」に基づく「他力性」を重要視していたのである。<sup>(38)</sup>

しかし、柳が注目するのは、製作する過程だけでなく、実用面においても同様である。柳は、着物としての側面から着用時の形と夏着の二点について検討し、「さなぎだに張りのある糸ですから、糊を含んで輪郭が殆ど直線から成り立ちます。ですから線が切りつめられて、無駄な形を許しません」と述べ、「布の性質と仕立方」から生まれるその特徴を「実に見事」と称賛するとともに、「ひいやりして、涼しくて、風通しがよくて、汗を早く取り去ってくれ」という性質が「暑くて湿気の多い琉球に、打つてつけの着物である」ことを強調する。加えて、単に暑い気候に適した着物というだけでなく、変色を防ぐために「ししくわさあ」の汁を数滴垂らすというような生活の知恵に關しても、「土地から生れた布」だからこそ「着物の取扱ひ方が巧」と評している。<sup>(39)</sup>

以上、このような形でその製作過程から用い方までを丁寧<sup>(40)</sup>に記述した芭蕉布の美しさと本質に關して、柳は次のようにまとめる。

どんな安ものでも、それが伝統的な芭蕉布である限り、醜いと云ふものはありません。荒いものなら力があり、細かいものなら優しさがあります。さうしてどんなものも健康です。その材料と手法とが不健康な性質を許しません。伝統を守る芭蕉布である限りはどこまでも確実さと安全さとを保障されてゐるのです。

芭蕉布が持つ「健康さ」とは、沖繩に生える天然の芭蕉や染める際に用いる山藍、「てかち」といった自然の素材を用いることだけでなく、それらの素材を用いて「協同」で作られる製作過程や、体のラインに沿うような無駄のない形に仕上がる完成形、高温多湿の風土に適した性質を有し、地域の素材を用いて変色を防ぐ等の知恵にも当てはまる。したがって、ここで柳が強調するような「健康さ」とは、素材、製作工程、実用のあらゆる側面における健全性からなる「健康」であり、芭蕉布を実際に使いこなす「暮らし」における有機的な「健康さ」であることが理解されよう。一九三〇年代に、「健康の美」は実際の「モノ」を通して「生活」の中で深く考察されていった。

### (三) 戦時下の「新しき美の標準」と地方文化運動

一九三〇年代に「健康の美」が生活空間の中で把握され、具体的な「不健康なもの」「病的なもの」との比較を通じて検討された後、四〇年代に入ると、柳はその生涯の中で最も「健康」という語句を用いて「美の標準」を説き、各論稿において「健康」の意義を繰り返し強調するようになった。最も特筆されるのは、四〇年に「新しき美の標準」として「健康の美」を掲げた点であり、二〇年代半ばから始まった民藝運動の展開に比例し、柳の民藝論も深化していくなかで、「健康の美」はその座標を安定させることとなった。

一九四〇年三月の『工藝』一〇二号に発表された「健康性と美」では、「個性」を重んじ「自由性」を極度に求めた「意識の時代」<sup>(42)</sup> Ⅱ「近代」の特色を「悪魔的なものや、廃類的なものや、変態的なものや、夢幻的なもの」を産んだ時代として否定的に捉え、「病的な要素」と「美の正道」を区別するなかで、後者の「美」の問題を「最も緊要な切実な問題」として提示する。そして、「本道の美」Ⅱ「常態の美」こそ「人類が則らねばならぬ正道の美」Ⅱ「健康なもの」として定め、一般に人が「健康」である時、特別「健康」を意識しないという点を読者に語りかけながら、「病氣」に罹り「不健康なもの」が染み込んだ「現在」において「健康の意義」を改めて考える必要を説く<sup>(43)</sup>。

柳は、「健康」が「決して特別な状態を意味しない」こと、「健康の美より生活に即した美はない」こと、「健康は生理に於ても、道徳に於ても、社会に於ても、美学に於ても、当然基準となるべき原理でなければならぬ」ことをそれぞれ強調するが、他の価値との関係性はどのようになるのであろうか。柳は「美には色々な相があらう」と問いかけ、「強い美」「弱い美」「激しい美」「静かな美」「鋭い美」「優しい美」「楽しい美」「悲しい美」「皮肉な美」「冷酷な美」「陰鬱な美」等の様々な「美の相」を挙げながら、「併し私達はそれ等の様々な美の相を眺めてその中のどれが、価値として最も上位に置かるべきかを問ふことが出来る。又どれが吾々の生活にとつて、最も重要であるかを省みることが出来よう」と提起し、「近代」において求められた「異数な美」「変調の美」と対比させつつ、「健康の美」を最上位に位置づけた<sup>(44)</sup>。

同年一〇月に書かれた「新しき美の標準」においても「私達の長い間の観察と経験とが到達したものは、実に「健康な美」と云ふことに外ならなかつた」と述べられ、「肉体的な常態」にとどまらない「あらゆる文化面」の「健康な様態」が重ねて強調された。そのうえで、「健康」がどのような形で具体的に実現されるのか、

「遊ぶ者より働く者にもつと健全な肉体や精神が宿る」という比喩も引用されつつ、「如何に生活に即したものの、即ち實際的な生活に根ざした領域にかかる健全な性質が多いかを看却することが出来ない。言ひ換へれば実用性に結合することによつて美は健康を取り戻すのである」と、「用」と「健康」の結びつきが指摘され、「就中民藝の世界が、如何に多く健康の美を今日迄保有して来たかを解するであらう」と展開される。<sup>(45)</sup>

他方、一九四五年に書かれた「新体制と工藝美の問題」や「時局と美の原理」においては、上述の「健康の美」が戦時下の状況との関連から論じられている。前者では、同時代において工藝団体は多数存在する一方、民藝の理念を「完成する」ためには、民藝運動こそ「新体制の要望」「新組織の要求」に寄与できる存在として、時局との共鳴が力説される。しかし、そのような戦時下における民藝の強調は「新体制への迎合とか、在来の立場の放棄とかを意味するものではなく、民藝の「立場は時勢に引きづけられる消極的なものではなく、寧ろ新しい体制を正しい方向に深める積極的な仕事である」と慎重に位置づけられ、「新体制」の要求する美がまさに「健康の美」であることが唱えられる<sup>(46)</sup>。後者では、「民藝の原理こそは、如何なる時代にも即応し得る用意である。それは時局の性質によつて左右されない。なぜなら不動な原理はいつの時代に於ても、妥当な規範的権威を有つからである」と述べられ、「美を通しての生活の健康化」が特定の時代にのみ当てはまらな  
いと留意されながら、戦時下においては一層省みられるべき内容であることが綴られる<sup>(46)</sup>。時局に対する親和性を高めつつ強力に発揮された「健康の美」論は、実際に大政翼賛会文化部の主導した地方文化運動の実践を担う形で展開していった。

時期は前後するが、四一年一月にパンフレット形式で翼賛会文化部から発表された「地方文化新建設の根本理念と当面の方策」では、「当面の方策」の「地方文化の伝統維持並に発揚」において、「民藝の保存とその健

全なる発達を指導すること」が明確に記されており、地方文化運動の開始期において、「民藝」はすでに「維持」「発揚」されるべき「地方文化の伝統」の中にはっきりと位置づけられていた。そして、柳はまさに「講演会、講習会、座談会、展覧会等の開催」「ラヂオ、新聞雑誌、出版文書等の積極的活用」によって「文化の地方的特色を最大に發揮せしめる」実践へと乗り出し、「東亜文化新建設の基盤」を確立する「新体制」に共振していったのである。<sup>(47)</sup>

柳は、四〇年九月に日本民藝館で開かれた農林省積雪地方農村経済調査所主催による地方工藝振興機関結成のための協議会にて「新体制の手工藝文化組織に対する提案」を説明し、そのなかで「民族的にして健康な美」といふものを示したものが一番工藝として本髓のものであるといふ結論<sup>(48)</sup>を披歴した。このような柳の意識は、秋田県角館の伝統工藝品である樺細工の伝習を通して、実践へと発展した。「用途を旨」として作られた樺細工は「出来るだけ健美で無駄の少ないもの」であり、まさに「生活」のなかで「健康の美」を彩る工藝にはかならない。戦時下、柳の民藝思想における「健康の美」は、地方文化の「顕揚」を思想・実践両面において下支えたのであった。

### 三 戦後の「健康の美」論

#### (一) 妙好人との邂逅

戦後の柳思想において特徴的なのが仏教美学論であることは明らかであるものの、「健康の美」論の側から民藝論を捉えた場合、妙好人の存在が興味深く映ることは看過できない。妙好人とは、浄土真宗の篤信者を指

す言葉で、柳は特に現在の鳥取県鳥取市に実在した妙好人「足利源左衛門」(「因幡の源左」)に関心を抱き、一九五〇年九月に『妙好人 因幡の源左』を上梓した。<sup>(50)</sup> 源左に対する柳の意識は、それ自体が仏教美学論の文脈において意味を持つものだと考えられるが、本稿では、柳が民藝品を「妙好品」と呼称し、ホイットマンや木喰上人に見出した身体的・精神的「健康性」を妙好人にも同様に見て取るうとした点を中心に検討する。

柳は、源左の身体的特徴について「彼の丈は五尺四寸ばかりであった。躰質は頑丈で骨格は逞しく、眼は大きく口許はしまり、特に彼の両手は弛まざる労働のしるしであった」と記述し、食生活と健康に関しては「彼は健康であった。∴彼は病気をしたことがなかった。従つて薬もとらなかつた。酒や煙草も飲まなかつた」と説明する。<sup>(51)</sup>

このような「健康」な源左の姿は、ホイットマンや木喰上人を想起させる。柳は「労働」に生きる源左にも注目し、「彼の勤勉は驚くばかりであった。∴人間は働くやうに造られてゐると彼はいつも云つた。働くことを彼は寧ろ可愛がつた。∴彼は道路の改修とか水害の修復とか、公の仕事には進んで労力を捧げた」と特筆する。<sup>(52)</sup>

「献身的」な源左の人間像が、木喰上人と同じように宗教的な側面に因っていることは言うまでもないが、「働く」ことを喜んだ姿勢に柳が関心を抱いていたことは想像に難くない。柳は、妙好人を決して稀有な「天才」として見ておらず、「時代」が生んだ「民衆」の一形態と見ている。すなわち、「健康」に生き、仕事に勤しむ妙好人源左は、「無名の工人」から生み出され、生活の中で「労働」する民藝品と同じことになる。「人」に対する柳の興味関心は、ホイットマン、木喰上人に始まり、戦後は妙好人にまで至ったが、その見方に一貫していたのは、身体的・精神的な「健康性」であり、彼らが生み出した「モノ」(詩・仏像・言葉)で

あり、彼らを生んだ「時代」であった。

## （二）茶の病い

戦後唱えられた茶道批判論では、茶の課題・論点を「茶の病」「茶の功罪」と掲げながら、家元中心主義的な同時代の茶の在り方を痛烈に批判している。戦後に書かれた柳の茶道論のうち、最もよく知られている、一九五〇年三月に発表された「茶」の病ひ<sup>53</sup>では、「型」に嵌り「風流」を気取った茶、茶人の「眼の力」の低下、「権威」や「金力」に依存する茶、実態の伴わない「家元中心主義」、免許制や「十職」「道具屋」をめぐる経済の相互依存体制、「茶室」と普段の生活の分離等の側面を鋭く暴いている。

「茶」の病ひの後、柳は五〇年代に多くの茶道論を著し、それらをまとめて五八年一〇月に『茶の改革』を刊行する。このなかで、柳は「モノ」論としての民藝思想と仏教美学論を融合させ、茶道論の見取り図を提示する。すなわち、「茶」の歴史における「功罪」を明らかにし、「正しい茶」を取り戻そうと考えたのである。柳は「茶人たる資格」として、「眼力の人であること」「筋の通った茶器の所持者であること」「必然さのある茶法を心得ること」「心の淨い人、清貧の人、脱落の人、私なき人」「平常の暮しに「茶」の精神の活きている人」「創造力のある人」「情操の豊かな人」をそれぞれ提示する形で、時代の下降とともに「必然さ」を欠きながら定着した「型」や「風流」、「眼力」の低下を見直し、「モノ」を「直観」する「本来的な茶」を志向する。<sup>54</sup>

このような茶に対する分析の過程で、柳は茶室に「健康」を取り戻そうと、自ら茶会をデザインするという実践に出た。五五年一二月五日に日本民藝館を会場として試みられた柳考案の茶会は、「茶室」「茶室外」の分離や「道具屋」との癒着関係を克服した形の「茶」であった。柳は、五六年三月の『民藝』三九号の「附記」

にて「私には今までの茶室も、どうも弱々しく繊細で、がまん〔ママ〕が出来ぬ。建物にももつと健康を取り戻したい。特に家元や道具屋などとは関係のない会にしたのである」と振り返る。しかし、柳が念頭に置くのは、茶室だけではなく、「作法」「茶を点てる者の服装」にも及び、「必然さのある法」という点からも、「茶」の集りを「楽しいものであると共に、淨いものでありたい。それに自由さがなければ活きた茶にはならぬ」と捉えている。<sup>(35)</sup>

「不健康」で「病」を抱えた茶の実態を受け、かつて初期の茶人らが「見立てた」ように、「眼」によって必然的で「自由」な茶を模索したこと、これが柳の民藝思想の到達点であり、「健康の美」論の最後の実践だったように思える。

### (三) 民藝の脱形式化と「健康」

戦後唱えられた民藝論は、一つに「民」を強調したものがあり、他方「民藝」という枠組を「意図的に」解き放ち、「モノ」を「直観」という原点に立ち返ろうとしたものがある。しかし、前者については、柳は「民主主義」の時代になったから「民藝」を提唱したわけではないと留意し、その「不変性」<sup>(36)</sup> Ⅱ 「不動の原理」を改めて提示した。また、後者については、形容詞的に「民藝」が用いられる事例を憂い、「民藝」の「脱形式化」<sup>(37)</sup> Ⅱ 「立場なき立場」の提示を主張した。

一九四六年七月の『民藝』七〇号に掲載された「民藝の強み」では、時代を問わず提示される「民藝論」<sup>(38)</sup> Ⅱ 「規範としての美論」の核となる部分が説明される。柳は「この世には余りにも変説が多く迎合が多い」と嘆きながら、「民藝美論が常に標榜する「健康の美」は、時代を貫いて不変である。戦前と雖も、戦中と雖も、



戦後と雖も、堂々この一本槍で通しおほせる」と強調する。そして、そのような「健康の美」という「一本槍」は「古い」「新しい」という時間的な物差しで評価できるものではなく、「永遠の今」の中に在る「不動の原理であることを述べる。<sup>(56)</sup>

戦後、柳は「民藝」が誤って認識されることを嘆きながら、『手仕事の日本』（一九四八年六月）や『日本の民藝』（一九六〇年二月）等の著作を通して、北は北海道から南は沖縄までの生活工芸、そして東アジア、世界各地の民藝品を詳細に取り上げ、それぞれの地域に残る固有の自然と生活文化の実像を通して、「健康の美」の重要性を繰り返し論じた。民藝思想の展開とともに「モノ」と「生活」の在り方も見直され、「健康の美」もまた、「時代」を貫く「美の標準」であり続けた。

### おわりに―民藝と「健康」

本稿では、柳宗悦の民藝思想における「健康の美」概念について検討してきた。以下、簡単にまとめてみたい。

一九一〇年代に傾倒したメチニコフとホイットマンを通して、柳は後の民藝思想に繋がる「健康」の重要性を自覚した。それは、第一に「順生涯」のための「健康」の重要性であり、第二に「当たり前」を自らの身体と思想で体現した人間性における「健康さ」であった。これらの受容の後、二〇年代半ばには木喰上人の仏像と「直観的」に出会い、ホイットマンに見出したものと同様の「健康さ」を上人にも見出した。そして、柳は『日本民藝美術館設立趣意書』において、「健康」的な美しさの意義を記し、二〇年代後半には、生活の中で

「健康」的な工藝を用いることの意味を問い直し、『工藝の道』に見られるように、工藝の「健康さ」と実用性の密接な関わりについて体系的に論じた。

民藝館の設立構想と生活・工藝のトータルデザイン化が模索されるなかで、一九三〇年代に入ると、同時代に蔓延る「不健康なもの」「病的なもの」との比較によって、具体的な「健康性」が明らかにされた。生活空間や展示空間を「健康」的なものにしていくという思考の枠組みは、究極的に「台所」への着目として展開し、「モノ」「人」がともに忙しく働くことが「健康の美」に発展するという主張に繋がった。三〇年代末に集中的に傾倒した沖縄文化についても、芭蕉布に対する関心からも窺えるように、「モノ」の素材、製作過程、使用方法を有機的に把握し「健康」を読み取る柳独自の思考方法が如実に示されている。

四〇年代に入ると、戦時下の国策と共振しながら、むしろ時局に寄り添う形で、民藝思想は理論的にも実践的にも円熟していくこととなった。それは、秋田県角館の伝統工芸品である樺細工の伝習に見られるように、過去の古民藝を保存・啓蒙していくという実践だけでなく、現存する民藝文化をいかに守り抜くかという新作民藝の取り組みにも発展していった。「民族」（「日本的なるもの」と「健康の美」の「顕揚」は相互に親和性を共有しながら民藝を形容する第一の表現となり、「健康の美」は「新しき美の標準」と設定され、地方文化運動を下支えすることとなった。

戦後、柳は妙好人に対して、ホイットマンや木喰上人と同じような身体的・精神的な「健康性」を見出すとともに、痛烈な茶道批判論のなかで、同時代的な「茶の病」を列挙しながら、他方、自ら茶会をデザインするなど、「茶」に「健康」を取り戻そうと尽力した。戦後には、民藝が特定の時代にもみ適応する存在ではなく、「不変」的な理念である旨が改めて強調され、「健康の美」こそが「どの時代」においても最高位の美であるこ

とが繰り返し唱えられた。

このように、柳の民藝論における「健康の美」とは、民藝運動の展開とともに深化した「美の標準」であり、常に具体的な「不健康なもの」「病的なもの」の事例との比較を通じて明確化された美概念だったことが理解される。そして、「健康の美」は、単なる「モノ」の実用性だけを強調した表現ではなく、「モノ」の素材からそれを使う生活の在り方までをも有機的に把握する価値標準であり、「近代の生活」において「モノ」と「人」の関係性を問い直す方法として提起された思考の枠組みだったことが考察される。

個別具体的な民藝を「眼」で見出していった柳の民藝思想は、運動の展開とともに体系的に整理され、民藝美の特徴についても「実用」「多量」「地方」「自然」「無銘」「廉価」等の要素別に細かく記述されていた。そのなかで、「健康の美」や「健康性」は「用の美」「実用性」に下支えされた民藝論の核となる概念であることが提示された。すなわち、「健康の美」とは、「不健康」で「病的」な同時代の工藝や生活の実態を省みる過程で「民藝」の方向性を決定づけたものだったのである。このように考えると、柳の民藝論は、単なる工藝論にとどまらず、「モノ」と「人」の関係性を再考し、「健康の美」で溢れる生活を実現するという一種の社会改善の意味を内包した文化思想だったと考えることができるのではないだろうか。

#### 附記

新潟県下の木喰仏に関する史料は、新潟県立文書館、柏崎市立図書館にご提供いただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

註

- (1) この理由については、例えば「健康」という表現が他の美概念と異なり、比較的平易な単語であること、柳思想における「健康」概念を網羅的に、そして体系的に整理することが容易ではないことが挙げられよう。朝鮮芸術論と「健康の美」の関係については、李進熙「柳宗悦と朝鮮の美」(『全集』六卷(月報))を参照。
- (2) 鶴見俊輔『柳宗悦』(平凡社、一九七六年)、阿満利麿『柳宗悦―美の菩薩』(増補版)(筑摩書房、二〇一九年、初版はリプロポートより一九八七年)、大沢啓徳「柳宗悦における「健全な美」について」『哲学世界』三三三号(早稲田大学大学院文学研究科、二〇一一年)、大沢啓徳『柳宗悦と民藝の哲学―「美の思想家」の軌跡』(ミネルヴァ書房、二〇一八年)。
- (3) 前掲、鶴見著、九六〜一九頁。
- (4) 前掲、阿満著、一六八〜一七〇頁。
- (5) 前掲、大沢論文、一四〜一五頁。
- (6) 前掲、大沢著、三〇〜三二頁。
- (7) 同右、二二二頁。
- (8) 前掲、鶴見著、一〇九頁。
- (9) 同右、九六〜一〇八頁。
- (10) 同右、一一五〜一二六頁。
- (11) 「メチニコフの科学的人生観」(『全集』一卷)、一二二頁。
- (12) 同右、一二五〜一二六、一四〇頁。
- (13) 「ホキットマンに就て」(『全集』五卷)、一四頁。
- (14) 「肯定の二詩人」(『全集』五卷)、八四頁。
- (15) 「ホキットマンに就いて」(『全集』一卷)、二九六頁。
- (16) 木喰仏に関する近年の研究では、五来重『円空と木喰』(淡交社、一九九七年)などを参照。
- (17) 「木喰上人に就て」(『全集』七卷)、二七一〜二七二頁。

- (18) 「木喰上人略伝」〔『全集』七巻)、二六頁。
- (19) 「故郷丸畑に於ける上人の彫刻」〔『全集』七巻)、一〇五頁。
- (20) 「上人の日本廻国」〔『全集』七巻)、三三三頁。
- (21) 「木喰五行上人畧伝」〔『全集』七巻)、二五一―二五二頁。
- (22) 「木喰雜記」〔越後タイムス〕一九二四年一月二日付、第五面。
- (23) 「世界的に珍らしい木喰上人の藝術 荒寺に彫り残した仏像と其無欲恬淡な生涯 柳宗悦氏談」〔新潟新聞〕一九二五年五月二三日付、第五面。
- (24) 「解説」〔『全集』八巻)、六三二―六三三頁。
- (25) 『日本民藝美術館設立趣意書』〔『全集』一六巻)、五頁。
- (26) 同右、五―六頁。
- (27) 「下手ものゝ美」〔『全集』八巻)、六頁。
- (28) 同右、六―七頁。
- (29) 『工藝の協団に関する一提案』〔『全集』八巻)、四七―五七頁。
- (30) 『工藝の道』〔『全集』八巻)、七六頁。
- (31) 国産振興東京博覧會編『東京商工会議所主催 大禮記念国産振興東京博覧會事務報告』(大禮記念国産振興東京博覧會・東京商工会議所、一九二九年)、三七七頁。
- (32) 「挿絵小解」『工藝』三五号〔『全集』一一巻)、二七八頁。
- (33) 同右、二七九―二八〇頁。
- (34) 近代日本における美術と工藝の關係については、木田拓也『工藝とナショナルリズムの近代―「日本的なもの」の創出―』(吉川弘文館、二〇一四年)、佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学―』(吉川弘文館、一九九九年)、土田眞紀『さまよえる工藝―柳宗悦と近代』(草風館、二〇〇七年)を参照。
- (35) 「帝展の工藝」〔『全集』八巻)、四一〇頁。
- (36) 「沖繩の芭蕉布」〔『全集』一五巻)、二六頁。

- (37) 『芭蕉布物語』(『全集』一五卷)、三八三頁。
- (38) 同右、三八六～三九八頁。
- (39) 同右、四〇一～四〇四頁。
- (40) 同右。
- (41) 「新しき美の標準」(『日本文化時報』七二号、一九四〇年一〇月)による。中見真理『柳宗悦 時代と思想』(東京大学出版会、二〇〇三年)、二四三、三七五頁。
- (42) 「健康性と美」『工藝』一〇二号(『全集』九卷)、二二五～二二三頁。
- (43) 同右。
- (44) 「新しき美の標準」(『全集』九卷)、二三五～二四一頁。
- (45) 「新体制と工藝美の問題」(『全集』九卷)、二四二～二六一頁。
- (46) 「時局と美の原理」(『全集』九卷)、五六八～五六九頁。
- (47) 「地方文化新建設の根本理念と当面の方策」(北河賢三編『資料集 総力戦と文化』一卷、大月書店、二〇〇〇年、八頁。
- (48) 『全集』九卷、五七三頁。
- (49) 「樺細工の伝習」(『全集』一一卷)、五三七頁。
- (50) 柳は、鈴木大拙を経由し妙好人の存在を知った。前掲、中見著、三七七頁。
- (51) 『妙好人 因幡の源左』(『全集』一九卷)、三五八～三五九頁。
- (52) 同右、三五九～三六〇頁。
- (53) 『全集』一七卷、三〇九～三三九頁。
- (54) 『全集』一七卷、三六～三七頁。
- (55) 「解題」(『全集』一七卷)、六五〇～六五二頁。水尾比呂志『評伝 柳宗悦』(筑摩書房、一九九二年)、二七六～二八九頁。
- (56) 『全集』一〇卷、二四～二五頁。

The Formation and Deployment of the Concept “Healthy Beauty” in Mingei Theory by Yanagi-Muneyoshi

SUIZU, Tomohiro

The main purpose of this article is to clarify the formation and deployment of the concept “Healthy Beauty” in Mingei theory by Yanagi-Muneyoshi. Yanagi was devoted to Ilya Mechnikov (1845–1916) and Walter Whiteman (1819–1892) in the 1910s. Inspired by them, he got the concept of “health.” After that, he investigated Korean Arts and intuitively encountered with *Mokujiki-butsu* (Statues of Buddha carved by *Mokujiki-shonin*). As a result of those experiences, he presented “Healthy Beauty” as the highest-ranking beauty that could be found in “Getemono.”

Ordinary and natural “Healthy Beauty,” supported by “practicability,” was defined as an ideal beauty, for which was comprehensively aimed in living and exhibition space, through various practices for newly produced folk-crafts. Moreover, the conceptual significance of “Healthy Beauty” was clarified through criticism of something unhealthy and pathological. “Healthy beauty,” which presented as a “new standard of beauty” in times of war, was consistently emphasized after the war. Then, it became essence of Mingei theory.

Considered “Healthy beauty” as the most significant concept, the highest-ranking “standard of beauty” that was supported by “the beauty of use,” it is concluded that Mingei theory is not only the theory of crafts but also a kind of ideology of social reform that implied the meaning of improvement of livings which should be reflected on daily life.

（令和元年度史学専攻 博士前期課程修了）